
記憶のカケラ

雲井月哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶のカケラ

【Nコード】

N4808F

【作者名】

雲井月哉

【あらすじ】

『僕の、大切な思い出。そしてこれはそのカケラ』。過去の思い出から、そして今へ、時間は進んでいく。少年は、日々続いていく日常の中で悩み続ける。恋愛、友情、勉強…。少年はさまざまなものを抱えながら生きていき、そして同時にさまざまなものを失っていく。彼が行き着く先は一体なんなのだろうか

第一話 『過去　くキツカケ』　Ⅰ

「オレが好きなのは…夕紀^{ゆき}、お前だよ」

僕が彼女——秋本夕紀^{あきもと ゆき}——と出会ったのは、そう。小学校六年生の時だった。幼馴染^{おさなじみ}と呼ぶにはもう遅いけど、かと言って幼馴染じゃないと言える年齢でもなかったように思える。

そもそものきっかけは、僕がその頃よくつるんでいた並木春介^{なみきしゅんすけ}というやつが、夕紀の友達である夏原香帆^{なつはら かほ}を好きになったことだった。春介は恋にはあまり積極的なやつではなく、いつも奥手^{おくて}で、なかなか恋愛が進むことがなかった。そんなわけで、僕が一肌脱い^{ひとほど}でやろうと思ったわけだ。

そして、その為にはまず一番最初に親^{した}しくなる必要があると僕は考えた。では、何をすればいいか。そう考えた末に出た答えは、香帆のメールアドレスを手に入れることだった。

「さて、一通り^{つうり}の作戦はできた。これでいくけど、何か意見あるか？」

僕が尋ねると、春介は頷いた^{うなず}。

作戦は実に単純なもので、ただやたらと堅苦しい^{かたくる}のが問題だが、これでまあ聞き出すことはできるだろう。

「じゃあまとめさせてもらうと、まずお前が夏原を放課後、下校し終わってなかなか人が通らない低学年の下駄箱^{げたばこ}のところに呼び出す。そこで上手くメアドを聞き出せ。ちゃんと話題作ってから話してい

けよ。あと、あんまり堅くなるなよ。緊張するとは思っけど」
「お、おう…」

朝、登校しながら僕らは今日のメールアドレスを聞き出す作戦のことについて話していた。それは十月のとある日のことで、今年は十月からすでに凍えるような寒さだった。その為、僕たちの声は、ほんの少しだけぶるぶる震えている。

その後、学校に着いた僕らは――クラスが違う為――それぞれの教室に別れた。とはいっても一組と三組なのでそれほど遠くない。次の会合は二時間目と三時間目の間の長めの休み時間だ。

一時間目の道徳の授業は自習となった。やることも特になかったから、僕はずっとぼーっとしていた。今日の帰りはどうなるかなあとか、ちゃんと成功するかなあとか、そんなことを考えてたがすぐにまた頭の中が空になりそうになる。まあ一年に一回くらいこういう日があったりするものだ。なんか集中できないのだ。

そんなつまらない道徳も終わり、二時間目に突入。教科は算数。僕の大嫌いな教科だ。今はグループで授業をする塾に通っているのだが、三年生の頃から五年生の頃まで、僕は公文式の塾に通っていた。その理由が算数が苦手だったからである。そしてその算数苦手の対策は結果、計算力は高めてくれたものの、文章題や図形問題の対策まではできなかったのである。そういうわけで、算数は大嫌いだった。だからこの授業は面倒くさいので気持ちだけさぼり。ノートはちゃんと取るんだよ、ノートは。

そんな怠惰な態度で臨む授業も終わりが近付き、休み時間がやってきた。チャイムが鳴り終わり、授業終了の挨拶を終えると、僕は席を立ち、春介のいる一組に向かった。そこで一組のヤツに恭介を呼ぶように頼んでみた。

「悪い、平田。春介呼んでもらえるか？」

「ああ、いいよ。ちよっと待ってて」

平田はそう言うと言春介を呼んでくれた。

呼ばれた春介は教室から出て、そして僕らはいつもの階段の踊場おどりばに向かった。

「さて、ちゃんと夏原に放課後來るように言ったか？」

「ああ、朝の時にちゃんと言った」

「なら上出来。あとは放課後を待つだけだな」

「そうだな…ははは…」

春介は少し不安そうな表情を浮かべる。

「なんか楽しみだな？ うはは」

僕は意地悪い表情で春介を見た。春介はやめるよーというような顔でこつちを見る。やれやれ。本当にシャイなやつだな、こいつは。すると、春介は突然真剣な顔つきになってこちらを向いてきた。

そして、春介が口を開く。

「あのさ、冬也ふゆ。放課後、一緒に付いて来てくれないか？」

「は？ 何言ってるんだよ。そんなことしたら台無しになるだろ」

突然の提案に僕は戸惑とまどった。恭介の目を見てみると、その目は先ほどと変わらず真剣な目をしていた。

「マジ頼むって。な？」

「うーん…」

少し考えたあと、僕は一緒に行くことにした。正直言うと、一緒に付いて行くのは結構面白そうだった。というか付いて行くのかなあとか最初は思っていた。だけどその場の雰囲気のこととかも考えて自重じゆうじゆうしていたのだ。しかしまあ、頼まれてしまっただけは付いて行きたくなる。

そんなこんなしてる間に、休み時間終了のチャイムが鳴った。

「あ、鳴っちゃった。またな、春介」

「え、うん。また」

別れを交わしたあと、僕たちは互いの教室に戻った。

その後、三時間目、四時間目と来て、その後昼食。昼食が終わ

ると掃除の時間で、それが終わってやつと昼休み時間に入る。昼休みが始まると、僕はまた春介のところに行き、放課後に向けての最終の中の最終確認。それが終わるとチャイムが鳴り、五時間目の授業が始まる。

その五時間目も、残り五分となっていた。

普段なら眠くて仕様しやうがない時間なのだが、今日ばかりは放課後のことで頭がいっぱいになっていた。自分のことではないのに、なぜか無性に緊張してくる。きっと春介も同じように、いや、きっと僕以上に緊張しているはずだ。あと少し。あともう少しで帰りの会が始まる。それが終われば…。

帰りの会が終わると、僕は即行そっこうでリュックを背に抱え、教室から出て行った。向かう先はもちろん一組の教室。だが、一組に向かう必要はすでになく、春介は廊下にいた。どうやら同じことを考えていたらしい。そして、僕らは互いの顔を見て頷き合い、低学年の下駄箱のところに向かった。

足が、軽やかに動いていた。

第一話 『過去 〜キツカケ〜 I 』（後書き）

こんにちは。作者の雲井月哉です。

まだまだ未熟者なので、もしよければアドバイス・感想等お書きください。

全て参考にしていききたいと思います。

第二話 『過去　くキツカケ』　ⅠⅠ

「おい…来ないぞ…」

僕は目を細めながら春介を睨み付けた。

「なんでだ…オレはちゃんと伝えたぞ…」

結局、その日夏原が下駄箱に来ることはなく、僕と春介はがっかりしながら帰り道を歩いていった。

まだ秋だというのに、冬の到来を感じさせる風が吹いていて、それが近くの公園の木々を揺らしていた。

「なんで来なかったんだろうな」

特に意味もなく春介に尋ねてみる。

「さあ…？」

掠れた声だった。

「まあ、明日訊いてみればいいじゃないか、春介」

「いや、でもなんかこうなっちゃうと気まずいだろ」

「それはそうかもしれないけど」

はあ、と僕は溜め息をついた。

疲れ気味の僕たちだったが、今日はやけに夕日が綺麗だった。

次の朝、僕は昨日と同じように春介と登校した。

春介は見た感じ元気がなく、なんと言うか、テンションがやたらと低かった。だから僕は面倒くさがりながらも、春介を活気付けようと色々声をかけた。しかし、春介はああ、とかうん、とか頷くだけで、僕の慰めはまるで効果がなかったみたいだ。

「なあ、元気出せよ」

「うん…」

「きつと忙しかったんだよ。な？　別に嫌いとかそういうわけじゃないって」

「うん…」

「今日ちゃんと理由を訊こう。オレもついていくからさ」

「うん…」

とまあ、こんな感じだ。

春介は終始ローテーションなままで学校に着き、僕らはそれぞれの教室に向かった。ただの猫背なのか気持ちの問題なのか、いや、おそらくどっちもだろう。後ろ姿の春介の背中曲がっていた。というか、あんなんでちゃんと理由聞けるかなあ。

その日の時間の流れはいつもより早く感じ、あっという間に休み時間になった。僕はいつも通り、一組に向かう。春介の姿を目で探っていると、春介の方が先に僕に気付き、教室から出て来た。

廊下では他の生徒たちが騒いでいて、その騒がしさが逆に僕を安心させている気がした。

「よう、春介」

「おう」

軽く挨拶をしたあと、僕らは階段の踊場に向かい、そして早速本題に入った。

「お前、理由訊けたか？」

「ああ、うん、まあね」

「あれ？ よく訊けたな、お前」

正直少し驚いた。朝の状態からして、理由とか聞けるような雰囲気じゃなかったのに。

「いや、あっちが朝の時にごめんつつつて、教えてくれた」

なるほど、それで訊けたのか。

「何だ、わりと打ち解けてんじゃない」

「そうか？ そうでもねえよ」

と、言いながら春介は微笑んだ。おそらく今日一番の笑顔だ。

「で、なんで来なかったんだよ？ 夏原」

「なんか、忘れてたみたい」
ん？

あれ、忘れてただけですか。え、恥ずかしかったとか、春介のこ
と嫌いとか、そういうのじゃなくて、忘れてただけですか。

「なんだよ、忘れてただけかよ！ 余計な心配して損したじゃねえ
か！」

「本当だよな。ははは」

なぜ笑ってる春介くん…。あ、そうか。『恋は盲目』とはよく言
ったものだ。これこそ『恋は盲目』。

「じゃああれか？ その勢いでメアドは訊けたのか？」

「いや…それが、今日の帰りはちゃんと忘れないからって、そん
で会話が終わった」

「ああ、そうなんだ…」

さっきのテンションはどうしたんだ、というくらい僕たちはまた
ローテンションに戻った。まあ、でも僕はやはりかなり楽しみだ
ったりする。春介には悪いが、こんなに面白いことはない。僕も性
格が悪いものだ。

「じゃあ、まあ今日の放課後訊き出そう」

「そうだな」

と、そこでチャイムが鳴った。僕らはじゃあ、と別れを告げてそ
れぞれの教室に戻る。そういえば、次の授業もまた自習だったな。

今日は自習がやけに多い。そういえば、最近授業の進み早いらしい
し、中学受験控^{ひか}えてるヤツらがいるからかもしれない。

自習時間、皆やることなく雑談^{ざつたん}などしたりして時間を潰^{つぶ}してい
た。中には机に座って何かしら勉強してるヤツはいたが、まあそう
いうのは少数だったりする。僕はといえば、僕は窓の外を見ていた。
外で春介がいる一組がレクリエーションということでドッジボール
をしていたのだ。他はどうか知らないが、僕らの学年はこういうレ
クリエーションをしているクラスがあると見てしまうのが、なぜか

習慣しゅうかんになっている。だから僕もその中に混まじりて外を見ていたのだ。

「楽しそうだなあ」

僕がそう呟つぶやくと、隣となりにいた北野きたのというヤツがそうだな、と返事をくれた。

「一組いっくって、なんか楽しそうだよな」

そう言われたので、僕はうん、と答えた。実際のところ、一組は楽しそうである。担任の先生も『坂下先生』と言って、僕が三、四年生の時にお世話になった先生だった。そして僕はその先生が結構好きで、一番の恩師おんしだと思っている。

それに比べて、僕のクラスはあまり楽しくない。

友達はそのこいる。先生も『藤谷先生ふじや』という若い——とは言っても来年で三十路みそじ——男の先生で、背は小さいけど優しく、それでいて格好かっこう良い、まさに兄貴あにきのような人で、おそらく坂下先生と同じくらい僕が出会った中での一番の先生だ。

しかし、そんな良い環境の中でもクラスを好きになれなかったのは気に入らないヤツ等がいるからである。授業妨害ほうがいになるようなことを言ったり、したり、正直しょうじきかなりうざかった。しかも下品げひんだ。だから僕はそいつらと敵対関係のようなものになっていた。だが相手は集団だから性質たちが悪い。注意すると、あとから陰口かげぐちは言われるし、みみっちい嫌がらせもたまにしてくる。

全く、小学校最後の一年なのに最悪だ。これで小学校時代がつまらなく終わるのか、と思うとなんだか嫌な気持ちになる。だけど、その一方でまあいいか、と諦める自分あきらがいるのも事実であり、なんと言つか、冷めてるんだらうな。

「そつえば」

と、僕が言っていると北野はなんだ、と訊いてきた。

「北野きたのって五年の頃何組だったっけ」

「五組だったよ」

今の時代とても珍しいことなのだが、僕のいる小学校は人数がかなり多く、人数の多さ大会なんてものがあつたら全国大会優勝も確

実だったろう。そのくらい人数がいたものだから、クラスは全年平均で七組まである。まあ、そんなことはどうでもいいか。

「五組か…。じゃあさ、夏原ってやつと一緒にだったんじゃないか？」

「ああ、そうだね。一緒だった」

実を言うと、僕はまだ夏原の顔も性格も何も知らなかった。しかしそれはさすがにまずい気がして、だから確か同じクラスだったであろう北野に訊こうと思った。

「どんなヤツだった？」

「んー、なんか凶暴なヤツだった。えーっと、菊池^{きくち}ってやつ知ってるか？ そういうヤツがいるんだけど、そいつの机蹴^けって、それで凹^{へこ}ませてたもん」

「え…。ま、マジか…？」

北野はマジ、と頷いた。

にしても、一気に夏原という人間のイメージが変わった。なんかもつとこ可愛らしいイメージがあったのだが、そのイメージは修正^{しゆせい}する必要があったようだ。というか、春介はそういうヤツがタイプなのか…。ちょっと意外だ。

あ、てか今一組いるじゃん。どいつだろう。

「なあ、北野。夏原ってどいつだ？」

僕は外を指差^{ゆびさ}して、北野に訊いた。

「なんだよ、やけに夏原のこと訊いてくるじゃん。もしかして、夏原のこと好きとか？」

それを聞いて、僕は顔が赤くなるのを感じた。ヤバイ。こういうのには慣れてない。

「な、んなわけないだろ！ 友達が好きなんだよ、そいつのこと。それでどんなヤツかなって思ったただけだ！」

「へえ…？」

しまった。僕はからかわれるのが苦手なのだ。からかうのは好きだけど、からかわれるのはあまり好きじゃない。

「まあいいけどね」

「そ、そうだ。どうでもいいよ。それで、どいつが夏原なんだ」
てか、考えてみれば顔も知らない人を好きになるわけない。我^{われ}ながらバカだ。

「ああ、そうだった。えっと、ほらあいつだよ。黄色い縞^{しま}模様の服着てるヤツ」

「へえ…あれが…」

そこにいたのは、癖^{くせ}つ毛^けでふわふわとした髪が肩くらいまで伸びていた子だった。凶暴というよりも、元気で明るく、少しのんびりとした感じの子である。

と、そこでチャイムが鳴った。一組が校舎^{いっしゅうや}に戻って来ている。クラスの男子たちはボールを持って外に行く準備をしている。その騒がしさが耳に微^{かす}かな不快感^{ふかいかん}を与える。やれやれ。去年までならなんともなかったのに、このクラスの騒がしさはどうも肌^{はだ}に合わない。そう感じるのは、もしかすると今までとは違うクラスの雰囲気^{ふんいき}に慣れていないだけじゃなく、僕自身の中でも何か変わっているからなのかもしれない。

でもまあ、今はそんなのどうでもいいや。久々^{ひさびさ}になかなか楽しい自習時間^{じしゅうじかん}だったし。

第二話 『過去 くキツカケ』 II 『(後書き)』

こんにちは。作者の雲井月哉です。

まだまだ未熟者なので、もしよければアドバイス・感想等お書きください。

全て参考にしていききたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4808f/>

記憶のカケラ

2010年11月21日03時56分発行